

クワインの自然種概念とパトナムの自然種の意味 ——外在主義における観点の問題——

尾形 まり花

はじめに

H・パトナムは、「水」や「金」といった自然種語の働き方に関する分析を通じて、語の意味を各人の心理に帰すことはできないことを示そうとした。パトナムによれば私が使う語「水」の意味はH₂Oである液体に結びつき、私の心の状態とは結びつかない。

しかしW・V・O・クワインは「(自然)種」という概念の形成にわれわれのそれぞれが物に対して見出す類似性が関与すると考え、直接提示によって種を学習させることができると述べる。「類似性」とは、われわれが見出す性質である。よってクワインによれば、種の概念の研究は、われわれの心の研究をその一部とせざるをえない。またそのために、提示された物にどのような類似性を見出すかは、「文脈」によって異なりうる。

パトナムは、クワインの自然種の示し方はうまくいかないと批判する。なぜなら、クワインの直接提示は、語を教える者と学ぶ者の言語の多くの部分があらかじめ共有されていなければ、成功しないからである。われわれは困難な二者択一を迫られているかに見える。一方ではある種の相対主義を認めざるをえず、もう一方では、自然種語を使うときには、話者は科学という文脈でしか何かを意味することができない。だが、この対立は本物であろうか。本発表では、この二つの自然種理論に共通する背景を指摘することで、二者択一でない道を提示したい。

1 パトナムの心理主義批判

パトナムによれば、フレーゲやカルナップは不徹底な心理主義批判をしているという。フレーゲやカルナップは「同じ」意味が一人以上にまた異なる時間にある人々によって「把握され」うるということから、意味は「公的」であると考え、意味を心的なものとする立場を心理主義であると批判した。だが、フレーゲやカルナップは意味を抽象的な実体と考え、依然としてその把握を個

人の心理作用であると見なす。彼らを含む「伝統的哲学者」らは、二つの語が同じ内包を持ちながら外延において異なるということは不可能であると考えていたが、それは誤りである (Putnam [1975] 218-9)。パトナムは心理主義を徹底させるために以下のような例をあげる。

地球上では「水」と呼ばれる液体は H_2O である。つまり「水」は H_2O を意味する。ここで地球と、ある一点を除いてはうりふたつである惑星双子地球を想定する。双子地球上では、人が泳ぎ、飲み、「水」と呼ぶ液体は、複雑な分子式を持ち XYZ と略記される。さて、地球に戻りまだ水の分子構造が判明していなかった 1750 年頃を考える。地球上にオスカー1 がいて「水」という語を使う。双子地球上にはオスカー2 がいて「水」という語を使う。二人のオスカーにはどこも異なる点がないとしよう。つまり「水」という語を使う二人の心理状態は同じである。にもかかわらず、二人の使う二つの語は異なる液体を指している。オスカー1 の使う「水」は H_2O を指しオスカー2 の使う「水」の語は XYZ を指す。また、そのときには地球上の水が H_2O であり双子地球の水が XYZ であることを知るものはまだいない。だが、1750 年と 1950 年で語「水」の意味が変わったわけではない (223-5)。それは、樹木ニレとブナの違いを知らない人がいたとしても、彼の言う「ニレ」はブナの集合とは結びつかずニレの木の集合と結びつくのと同じである。彼の言う「ニレ」はニレを意味しているとパトナムは言う (226-7)。

パトナムは以上の思考実験より次のような結論を導く。自然種のような語はその外延によって意味が決まるが、それは言語的分業があるためである (227-9)。オスカー1 は自分が H_2O を意味していたことを知らなかったが、彼の語「水」は H_2O を意味していた。彼の使った語の意味は外延によって決まり、外延は専門家によって決定される。つまり語には蒸気船のように共同作業を必要とするものがあり、その意味を心理状態に帰すことはできない。そういうわけで意味は頭の中にはないのである。よって自然種語の意味を伝える場合、人は以下の二点からなる中核的事実を伝えなくてはならない。それは一つにはその種の正常なメンバーの重要な特徴であり、それはレモンであれば黄色であったり酸味があつたりするという特徴である。もう一つにはその種の外延 (レモンであればレモンそのもの) である (Putnam [1970] 151)。

2 デイヴィッドソンによる言語的分業批判

だが、D・デイヴィッドソンはパトナムの考察のうち、語の意味を事物に結びつけることと言語的分業を明確に区別し、思考を事物に結びつけることは評価しながらも言語的分業に関しては評価しない。

「もし私が彼らを理解しているのなら、私は、バージやパトナムと同じように、思考と事物のつながりが人々と世界の部分やアスペクトのあいだの因果的相互関係にあると考える (Davidson [1987] 29)」

「言語的分業」は、実際の話し手たちはおそらく専門家がいると信じなくてはならないということを示しはするが、専門家がいなくてはならないということを示してはいないのである。(中略)そこ「専門家が存在すること」から、これらの語の意味のある使用が社会的環境を必要としていると結論づけることはできない。(Davidson [1994] 114 [] 内引用者)

パトナムはニレとブナの区別がつかない人が発した「ニレ」という語であっても、その意味は科学的に同定されるニレに結びつくと言った。だがたとえばニレとブナの区別がつかない二人が、ブナの木を指しながら「あのニレの木の下で待ち合わせよう」と言いあい、待ち合わせが成立することもある。この場合、話者の発した「ニレ」は専門家の介在を経ずに事物を指示し、言いたいことを伝えている。

なぜ、微視的構造の同一性が、必然的に私の「水」という語の指示を決定する重要な類似性となるのか、私には理解できない。(Davidson [1990] 198)

微視的構造とは H₂O や XYZ などの水の分子構造である。パトナムの提示とは異なり、われわれの発話はいつでも科学的事実に関連しているわけではないとデイヴィッドソンは言う。確かに科学的には正しくない物言いも、何も伝えていないというわけではない。たとえばわれわれは、双子地球に H₂O の水を持ち込み、XYZ とひそかにすり替えておくこともできる。だれかがその水を自分が普段飲んでいる XYZ だと思って「水はおいしい」と言うとき、じつはその水が H₂O であったとしても、その人は何も言っていないことにはならない。それを

見たある人は、その発話を H₂O のおいしさについて述べていると考えるかもしれないが、その人自身は酒と比べて水がおいしいと考えているのかもしれない。後者においては、XYZ でも H₂O でも成り立つ発言である。デイヴィドソンはパトナムに語の意味を事物に結びつけつつも言語的分業は採用しないという立場をとるべきだと主張するのである。

だがこのような立場を推奨するデイヴィドソンは、パトナムのそもそもの目標を理解していないと考えることもできる。先の批判でデイヴィドソンは個人が事物に見出す「類似性」を問題にしている。パトナムの目標は心理主義の批判である。パトナムによるカルナップらに対する批判を思い起こそう。「この抽象的な実体〔意味〕の把握は依然として個人の心理作用であった (Putnam [1975] 218 [] 内原文)。」だがデイヴィドソンが言う類似性は個人の心理作用である。言語的分業とは私の使う語が何と類似し、何と関連しているのかを明らかにする作業なのである。よってデイヴィドソンの提案をパトナムが採用するわけにはいかない。心理主義を批判するには、意味を外部に結びつけるだけでは不十分なのであり、その把握が個人によっては可能でないという言語的分業が重要である。その点でデイヴィドソンとパトナムの違いは根本的な違いである。

3 クワインによる自然種概念

この二つの外在主義の違いを明確にするために、自然種の示し方についてパトナムとよく似た自然種（概念）の学習モデルを示しながら、類似性についても論じるクワインの議論を見てみたい。

クワインは、われわれが事物に見出す類似性から「自然種（種）」を定義することを試みる。クワインのあげる「自然種」は、赤くあることや、丸くあることから、フクロネズミという生物学的種に至るまで多岐にわたり、その集合はわれわれが通常「自然種」と呼ぶものの集合よりも大きい。それはクワインが類似性から種を定義し、種をわれわれの認識（または認知）以前に前提しないからである。

以下のようにして種を描き出そうとする人もいるかもしれない。つまり相対的類似関係にあてはまるように、種を次のような意味で「性質上球型である」何かの集合として描くのである。その集合には何らかの中心的規範からしかじか以上には異ならない諸事物だけを厳密に取り入れる。もし、正確さ

に関する深刻な犠牲なしに、求められる標準 (norm) を見事に例化する一つ以上の現実の事物 (パラダイム・ケース) (略) があることをわれわれが仮定できるのであれば、われわれの定義は容易である。(Quine [1969] 161 強調原文)

クワインの言う「標準」はパトナムの言う中核的事実における「諸特徴」に重なり、「パラダイム・ケース」はパトナムの言う「外延」によく似ている。パラダイム・ケースも外延も現実の事物であり、その選定には標準や専門家がかかわる。だが、クワインによれば、この定義はそのままではわれわれが望むような種を与えてはくれない。標準的な赤いものであるパラダイム・ケースは、現実の事物であるがゆえにまた形や重さも持つからだ。事物の直接提示においては「観点」が問題になるのである。よって、われわれがケースのどこに類似点を見出すのかは、それぞれの分野に適したそれぞれの観点からしか定義されない。色という分野では赤が、形という分野では球形が定義される。その分野においてはパラダイム・ケースによる定義によって種なる概念を導き出すことができる。われわれの日常的な観察と科学はともに類似性から出発するが、人は学習と分野の洗練によって分野ごとに異なる類似点に注目できるのである (168)。

しかしそれではわれわれの観点はどのように収束し、その分野に関する学習が可能になるのであろうか。クワインが訴えるのは生物学的基盤である。「類似性の規準 (standard) はある意味では生得的」であり、「何かは生得的でなくてはならない」(163)。生得的な類似性と学習により、われわれは多くのものを共有している。そして何が生得的であるのかの探究は科学としての心理学によってなされる。一見循環に陥っているかに見えるこのクワインの答えは、科学 (科学としての心理学) と哲学 (科学とはいかなるものであるのかという問い) がお互いを参照しつつ進展していくしかないという提言なのである。

だが、パトナムによれば、われわれの認識 (認知) から考えるクワインの理論的図式は「語の意味」という考えは成り立たないというクワインのペシミズムに起因しており、クワインの示すやり方では学習はうまくいかない。クワインは学ぶ者が教える者と言語の多くを共有しているため、教える者は学ぶ者にたとえばレモンについて受け入れられている文を告げるだけで良いとするが「しかし、問題はどの文なのかということなのだ (Putnam [1970] 147-8)」とパトナムは言う。パトナムによれば、クワインのように類似性の側から種を定義

するなどの観点が当の種に関して問題となっているかをあらかじめ伝えなくてはならない。それにはレモンに関して受け入れられている全ての文を伝えるという事が必要になってしまう。

よって、パトナムは、クワインのようにわれわれの認識について考える心理学から出発して理論相対的に（分野ごとに）事物と概念を結びつけるのではなく、自然種には中核的事実が存在すると考えなくてはならないと言う。重要であるのはわれわれが中核的事実を伝えることができるという経験的事実であり、意味の理論とはその経験的事象の検討と説明なのである（149）。語には意味があると考えることができるのである。

ここでわれわれは困難な二者択一を迫られているかに見える。一方はパトナムに見いだされる問題で、自然種語を使うときには、話者は科学という文脈でしか何かを意味することができない。そして、もう一方はクワインの側で、こちらの側では心理学に訴えて分野を絞っていく。だが、また心理学自体が科学である限り両者は循環していく。ある種の相対主義を認めざるをえない。だが、この対立は本物であろうか。

4 言語的分業とは何か

中核的事実を伝えることができ、意味論が成立することは経験的事実であるとパトナムは言う。ではクワインの言う心理学による収斂を批判するパトナム自身はこの経験的事象がどのように人々において収斂し成り立つと考えるのか。パトナムがあげるのはウィトゲンシュタインの「生活形式」であり、その中身とは「共有される人間本性(shared human nature)」と「共有される文化順応(shared acculturation)」である（149）。だが、これは實際上クワインが「自然種」であげている「生得的な類似性」と「学習」に重なるのではないだろうか。パトナムは先ほどのクワインに対する批判の中で理論的共有についてのみ論じていることに注目したい。だがわれわれはすでに見てきたようにクワインは理論的共有だけを学習の基礎としているのではない。生得的類似がわれわれの理論的共有を可能にしているのである。¹

¹ いうならば、ここでのパトナムの提案はクワインの自然種概念モデルに対して、科学を信じてそれを意味として認めペシミズムを捨てるように求めるという事に整理できるのかもしれない。しかし、クワインが言うようにわれわれの素朴な類似性は時に二次的なものである。色は食物の捕獲に役立つために「われわれの生得的質空間では王者であるが宇宙圏では区別不可能である（Quine [1969] 165)」。パトナムが後に「人間的な種類の实在論（Putnam [1983]）」と言い、"Realism With a Human Face (Putnam [1990])"と言うのはこの点に関する認

ここで考えたいのは、むしろこの二者の共通点である。クワインの言う「観点」は究極的には、素朴な観点も科学的な観点もどちらも専門家によって収斂させられる。素朴な観点は心理学者によって、科学はそれぞれの分野の専門家によって、類似性規準が探究される。つまりこれは自然種概念における言語的分業なのである。するとデイヴィッドソンがパトナムに指摘した問題は再燃する。われわれはわれわれが見ている側面をあたかも他人に決めてもらうかのようなのである。デイヴィッドソンはこうに言う。「われわれの思考の内容とわれわれの語の意味は、たいていわれわれの知らない要因によって固定されると考える人たちは」彼らの見方が懐疑論と同じ結論を導くことに関心を払ってこなかった (Davidson [1990] 22)。われわれの知らない要因とは水の分子構造や金の分子構造のことである。デイヴィッドソンはこのことをこのようにも言う。「私がここで直面しているのは、どうやらわれわれは自分が何を考えているのかを知らないようだ。少なくともわれわれが、自分は知っていると考えようには (25)」ということである。「われわれが知っているようには」とは私自身が「水」という言葉を使って何を伝えたいのかということだ。

言い換えるならば次のように言えよう。クワインの回答はわれわれの観点の問題を完全には解消していない。実際に一個の赤い球があるときに、ある人間がその赤さに注目すべきであるのか、形に注目すべきであるのかはあらかじめ決めることはできない。しかしその赤い玉を現に見ている私は自分がどこに注目しているのかを知っている。

だが、それはクワインにとって批判にはならない。クワインが目標とするのは個人個人の心理作用（把握）における観点の違いを解消することではなく、タイプの的に処理された人間の傾向である、傾向性を捉えることだからだ。クワインは、意味を公共化することによってではなく、数的処理を含む心理学に訴えて心を第三者的に扱うことによって、心理主義を否定している。もとよりクワインがあげるのは、パラダイム・ケースである。これは代表的事例であって、何を代表しているのかのパラダイムはパトナムが批判したように先立って共有されている。われわれが先に見たようにクワインはそのことによって払う犠牲も理解している。観点は文脈に依存し、文脈は観点に依存する。つまりこの循環は閉じており、心理学によって基礎づけているように見えて、それ自体がじつは事物から遊離する可能性をクワインは承知しているのだ。

識が変わるからだろう。しかしそれは同時に、認識が変わるのみで、パトナムの科学と言語の関係に対するモデルは 1970 年から基本的には変わっていないということでもある。

しかし、このことはパトナムにとっては重要なポイントである。パトナムが言語的分業を採用するのであれば、専門家の仕事（業）について考えなくてはならない。つまりそれは科学である。科学とはいったい何をしているのだろうか。小林道夫は科学という営みはいかなる営みかを解説し、このように述べる。「物理学が対象とするのは知覚に与えられる生の現象そのものではなく、それから抽象された一面なのである。これはしかし、それ自体で独立に与えられるものではない。(略) 一回限りの経験ではなく自然現象の「抽象的」属性であり、しかも「再現可能」(略) である (小林[1996] 30)。」パトナムの言う「外延」が、パトナムがこの時点で考えていたように、もし事物であったなら、パトナムの立場は外在的であると言える。だが、外延が言語的分業によってタイプの的に抽出されるなら、それは一つのパラダイムにおける一つのケースでしかない。²

このようにも言えるだろう。言語的分業を採用して個人の頭から意味を解放するのであれば、それは必然的に「一定の単語に結びつく『基準 (criteria)』がその単語を習得する話者のうちの一部にのみ知られる (Putnam [1975] 228『原文』) 社会的あり方に訴えて、私的言語の不可能性を主張することになる。しかし基準論は私的言語の不可能性を主張できない。何らかの公的基準によって公的言語ならざる何かを排除するというやり方は、むしろ公的言語ならざる何かの存在を前提しているからだ³。言語的分業は頭 (head) から意味を解放する

² このことは、パトナム自身が特に事物関与的であるとして、理論を展開している指標性と固定性の論点にも指摘できる。パトナムによれば、地球上の私が「これ」は水である」と言うなら、この事物関与的な「これ」は全ての世界（惑星）において「水」なのであり「この世界における水」となるわけではない。「水」という名辞は固定的であるのだ。(Putnam [1973] 706-7) よって「もし私が、「水」の表面的特性を備えてはいるが、異なる微細構造をもつ液体は、実は水ではないということに同意するなら」(強調原文 Putnam [1973] 708) 私は水の分子構造を知ることによって、「水」という語の正しい定義を知ることができるという。しかし、ここで私に「水」という語の正しい定義を教えるのは、私が「これ」と因果関係を持っていることではない。つまり、私は「これ」を目の前にはしているかもしれないが、「これ」の意味（記述）が「水」であることが先取りされているのなら、「これ」と私の因果的つながりは意味とは関わらない。私が XYZ を「水」とは呼ばないのは、上記の条件（「私が、「水」の表面的特性を備えてはいるが、異なる微細構造をもつ液体は、実は水ではないということ」）に同意したからである。（よって、この条件の後半に出てくる水にも「」が付けられるべきである。だがもし「ここに出てくる「水」は語ではなく、H₂O の微細構造を持つあの液体のことを表しているのだ」と考えるなら、「私が、「水」の表面的特性を備えてはいるが、異なる微細構造をもつ液体は、実は H₂O ではないということ」と書くべきであるだろう。しかし、もちろんこの文章は、パトナムの見地からは意味的にトートロジーである。）つまりそれは規約による真であって、事物関与的な意味の決定ではない。規約とはタイプタイプ間の対応規則である。ここには H₂O のサンプルしかなくわれわれが会話の中でその事物とどのような因果的つながりを持つのかということは反映されない。ここでも「事物」は意味が定まった後に出てくるのである。

³ この点に関して詳しくは、拙稿「基準論は私的言語の不可能性を主張できるか（尾形 [2010]）」を参照されたい。

かもしれないが意味を基準によって人々の頭 (heads) に結びつけることで、その正しさが大きな枠組みの中で内側にあることになってしまう。個人はその事物とは因果的関係を持っていない (外側を前提してしまう。) つまりいずれにしても言語的分業の採用はどこかの段階で相対主義を引き受けざるをえないのである。

パトナムがもし外在主義的であろうとするのなら、言語的分業によって指定される「抽象的一面」である外延ではなく、一個の事物そのものをあげなくてはならない。それは言語的分業によってではなく見ることや触ることによってひとりの個人と結びつく。だがそれは個人の把握・観点を可能にしてしまう。つまり意味は head と結びついてしまう。一個の事物と結びつくのは個人であり、科学は個人の言わんとすることを決定することはできない。一個の事物とそれに対する記述は区別でき、どのような記述を与えるのかはあらかじめ決めておくわけにはいかないからだ。ある赤い球に対する観点は赤さや形にはとどまらない。一個のレモンは「レモン」の外延であるだけでなく、「オレンジでもミカンでもないもの」であるかもしれない。「食後のデザートにしようと家人に「柑橘系の果物を買って」来るように頼んだ結果」であるかもしれない。一個の物はどのようにも再記述されるのである。

結語

するとパトナムに残された道は二つである。一つは言語的分業というアイデアを捨て、科学はわれわれの言語活動全体にではなく社会の中の一つの分野を担うと考えることである。(言語的ではない分業)。科学はその際にももちろん参考にされることもあるが、参考にされないこともある。ちょうど、通常「意味」と呼ばれる辞書的意味は専門家によって決定されてはいるがしばしば多義的であり、その中のどの意味を相手に伝えようとするのか、また相手が伝えようとしているのかに関して、個人は二階の選択をしなくてはいけないことと似ている。こちらの選択はデイヴィッドソンと共に歩むことであり、懐疑論には結びつかないかもしれないが、意味を個人の心理から切り離そうとするパトナム流の心理主義批判はできない⁴。

⁴ ここでは論じることができなかったが、デイヴィッドソンはこのパトナムの心理主義批判の失敗は、個人の「心理」を全て「デカルト的な狭い心理」と結びつけてしまった事にあると分析する。本稿で論じたパトナムによるクワインに対する批判にもこの「心理」観は影響していると分析することができる。この点については、個人と公共に関する別稿を準備中であ

もう一つは、われわれの知識は共同体によって体系的に保証されるため、意味が主観に結びつけられることも、個人ごとに言語そしてそこに内在する存在論が異なるということもないと考えることである。こちらの選択はこれはクワインと共に歩むことである。だが、そこに登場する「世界」はすでにして「現象の『抽象的』属性」である。周知のようにパトナムが選んだのは後者であり (Putnam [1983][1990])、パトナム自身は転向と呼んだが、われわれの見たところによれば、それは理論な内容の変更ではなく、呼び方の変更である。

だが、われわれが以上の考察から導くのは、われわれの思考が自然種のような外部環境と結びつけられるのだとしても、われわれは頭の中で考えると考えすることは依然として可能であるということである。つまり、パトナムが捨てるべきは、言語的分業であったのだ。個々の事物や出来事に関して、何に注目すべきであるかは、あらかじめ決定しておくことはできないからである。

文献

- Quine, W.V.O. [1960] Word and Object, The MIT Press.
- [1969] 'Natural Kinds', Ontological relativity and other essays, Columbia University Press.
- Putnam, Hilary. [1970] 'Is Semantics Possible?', Mind, Language and Reality, Cambridge University Press, 1975.
- [1973] 'Meaning and Reference', The Journal of Philosophy, Vol. 70, No. 19, 1973.
- [1975] 'Meaning of "Meaning"', Mind, Language and Reality, Cambridge University Press, 1975.
- [1983] Realism and Reason, Cambridge University Press.
- [1990] Realism With a Human Face, Harvard University Press.
- Davidson, Donald [1983] 'A Coherence Theory of Truth and Knowledge', Subjective, Intersubjective, Objective, Oxford, 2001.
- [1984] 'First Person Authority', Subjective, Intersubjective, Objective, Oxford, 2001.
- [1987] 'Knowing One's Own Mind', Subjective, Intersubjective, Objective, Oxford,

る。

2001.

——[1990] 'Epistemology Externalized', Subjective, Intersubjective, Objective, Oxford, 2001.

——[1994] 'The Social Aspect of Language', Truth, language, and history, Oxford, 2005.

小林道夫 [1996] 科学哲学, 産業図書.

尾形まり花 [2010] 「基準論は私的言語の不可能性を主張できるか」, 哲学第 61 号, 日本哲学会.

Wiggins, David [1993] 'Putnam's Doctrine of Natural Kind Words and Frege's Doctrines of Sense, Reference, and Extension: Can They Cohere?', Meaning And Reference, edited by A.W.Moore, 1993.

Austin, John, L. [1950] 'Truth', Philosophical Papers, 2nd ed., Oxford Univ. press, 1970.

柏端達也 [2003] 「コネクショニズムは素朴心理学に対して何か言えるのだろうか——「心」が頭の中にあるためのミニマルな条件」, 心の科学と哲学: コネクショニズムの可能性, 戸田山和久ほか編, 昭和堂, 2003.

(おがた まりか／千葉大学大学院人文社会科学部研究科 特別研究員)